「情報を評価し、判断する力」と「知性」と「市民性」*

児　玉　英　靖
（洛星中学・高等学校社会科教諭）

1．はじめに

今回の連続講座の実現に向けてご尽力された、中村百合子先生をはじめ立教大学司書課程のみなさま、足立正治先生に、心からの敬意と謝辞を送らせていただきます。

私は、４回の講座のうち、第３回の和田敦彦先生の回には参加できませんでしたので、中尾ハジメ先生（第１回）、影浦峡先生（第２回）、小玉重夫先生（第４回）のお三方の講座に関してのみになりますが、コメントさせていただきます。その中で、「知性の自由」と「専門家の限界」という２つの点を中心に、連続講座を受講して印象に残ったことをまとめてみたいと思います。

2．「情報を評価し、判断する力」

まず、中尾ハジメ先生が連続講義のいちばん最初におっしゃった、「知性を自由にする教育」ということについての問題提起、すなわち「知性」「自由」「教育」という３つのアンビバレントなものを同時に語ってしまうことへの気持ち悪さを、解決することなくズルズルと最後まで引きずってしまった印象がぬぐえませんので、まずそこから始めようと思います。

そもそも「知性」は「自由」であるべきなのか、「知性」は本来「自由」なものなのか、それを「教育」という権力性を伴う枠組みの中に閉じ込めることは可能なのか？そんなものを育もうなどというのは、やってもいいことなのか？

こういったことに無自覚なまま、この連続講座が始まり、そしてこうして最終回を迎えています。

ところで、この連続講座のタイトルにある、「情報を評価し、判断する力」って何なんでしょう。「リテラシー」ってやつですか？それでは「リテラシー」って何ですか？

それじゃ「生きる力」ってやつですか？それでは「生きる力」ってどういうことですか？これまでのみなさんのお話の中で出てきました、「震災のときに鉄橋の上で止まった電車を降りて歩いて帰る」だとか、「四国のおばあちゃんのところへ子どもだけで避難する」だとか、すべての知力を動員して生き延びなきゃならない、そんな状況に対応できることが、おそらく「生きる力」なんだと思うのです。しかし、そんなものを、学校教育や社会教育で、どこまで教えられるのだろうか。私も1995年の阪神・淡路大震災を京都で体験し、昨年の３月11日にも東京にいて、いずれも震度５を経験しました。震災後のボランティアに入った兵庫県西宮市でだとか、あるいは東京で帰宅難民となって一夜を過ごしながらつくづく感じたのですが、正確かつ迅速に情報にアクセスし、分析し、判断することは、学校で教えることが求められる「生きる力」とはまったく別の代物です。

それでは、小玉先生がおっしゃっていた「シティズンシップ」（私は「市民性」と言いたいのですが）でしょうか。市民というのは、主権者として、有権者として、社会にどんどん関わっていく自立した主体をイメージするのですが、そういうことでしょうか。

私はそれは「知性」ってやつなのかな、と思っているのです。

3．「専門家の限界」と「知性の自由の教育」

このことに関連して、影浦先生がお話しされた「専門家の限界」についても触れたいと思います。影浦先生のお話は、専門家とは「知っている人」であり、「知ることができないことを想定しない」「知っていること以外のことはなかったことにしようと思うから、知っているということになる」「あたかも知っていることを妥当なもののように見なすために、幻想的な世界を、想像的な世界を

＊本稿は、連続公開講座『情報を評価し、判断する力をいかに育むか』第５回会場にて口頭で行った報告（2012年1月28日、立教大学）に加筆したものである。

作り上げる」というものだったと思います。

それに対して、科学者とは「わからないことを知ろうとする人」「常に知らない人」で、「予想した範囲を逸脱して、事実を目の前にして考えることができる」とおっしゃっていたかと思います。

そしてその上で、なぜメディアリテラシーの専門家は黙っているのか、という問題提起をされました。私は、まさに「専門家」だからこそ「想定外」のことは考えられず提言もできなかったのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。もっとも、「情報リテラシー教育が、学習指導要領でも求められているから、やらなくちゃ」といった感じで、お上の権威付けの意味を疑いもしない（あるいはそれを政治的に利用する）情報リテラシーの専門家の方のお話をうかがったことがあるのも、事実ではあります。

さて、影浦先生が指摘された「専門家」の限界については、いろいろな方がおっしゃっています。私の勤務校の創立記念日の講演に、ご子息が卒業生であるご縁で、臨床哲学の鷲田清一先生をお招きしました。その講演では、わからないものに対して、わからないまま正確に判断する力、これは大事と直感的につかんでいく力が「政治的感覚」であり、これを研ぎ澄ましていく重要性が強調されるとともに、ほんとうの学びとは、わからないという息苦しさに耐え、ひたすらに考えていく「知性」のタフさを身につけることであるとのことでした。（ヴィアトール学園創立記念講演、2011年10月21日。筆者の聴講メモより）

わからないものに対するタフネス、それこそが知性なのだと思うと、中尾先生のお話とつながってきます。それではその能力をどうやって育むんでしょう。あるいは、これを自由にしてしまっていいものなのでしょうか。もしかして魔物を世に放つことになりはしないだろうか。

この問題に明確な答えを見出さずとも最終回までやってこられたのは、おそらく、ここに集まっていらっしゃる方がみなさん、情報や知的なことに関して「強者」だからなのではないかと思うのです。そんな「強者」のみなさんでさえ、先ほど、震災後しばらくして「あれだけ情報を見て疲れた」「嫌になって、しばらくネットなんか見たくない、テレビなんか見たくないと思った」とおっしゃっていました。

たぶんみんなそうなのだと思います。自由に考えて、いろんなことを聞かされて、しんどくなって、「もう誰か決めてよ」という人の方が多いときに、知性を自由にしてしまっていいのでしょうか。みんな知るようになって幸せですか。「自由からの逃走」（E.フロム）が始まるかもしれないわけです。

私は15年ほど前に、福井県の原発立地政策について調べたことがありました。実は、今回出てきた原発をめぐる情報は、そのころ私が聞いていた話とほとんど変わってはいません。スリーマイルのときもチェルノブイリのときもJCO事故のときも指摘されていたことです。これまで関心を向けられてこなかっただけのことだし、そしてこれからもそうあり続ける可能性はあるのではないでしょうか。

4．情報を読み解く力

第１回の中尾先生が映像で見せてくださったように、震災後の報道、とりわけ原発事故に関しては、明らかに「情報管制」「情報操作」「情報隠ぺい」が行われました。この連続講座が「情報を評価し、判断する力」を表題に掲げて始まったのも、このことについての問題意識があったからだと思います。

私は今朝京都から新幹線で東京に来たのですが、早朝に山梨県で震度５の地震があって新幹線が一時止まっていました。そして東京に着いたら、青森県でも震度４が記録されました。そもそも先日、「４年以内に震度７の地震が起きる確率は70％」という報道があったばかりです（すぐに別の低い確率が発表されましたが、それでもかなりの確率です）。私は真剣に、今すぐに京都に帰ろうかとも考えました。みなさんもここでこんな話を聞いていて、大丈夫なのですか？ついでに申しますが、ほんとうにこの街にオリンピックを招致するつもりなんですか？

また先日の北朝鮮のキム・ジョンイル総書記の死去の報に接して、どれだけの人が、北朝鮮が発表した死亡日時や場所、死因などを信じたことでしょうか。おそらく「もしかするとずっと前に死んでいて、隠していたんじゃないの？」と勘繰った方が少なからずいたのではないでしょうか。

このような眉唾物の報道に惑わされず、真実を

知ろう、というのは、わかりやすい話です。原発事故のメルトダウンをめぐる報道は、おそらくこの部類に入るでしょう。これは「知る権利」と情報公開の問題だと思いますし、そのチェック機関たるはずの大手メディアが横並びの大本営発表報道を繰り広げたことは、きわめて残念に思います。ただ、北朝鮮の発表には「ウソなんじゃない？」と反応するのに、スポーツ新聞や週刊誌の記事には「ほんとかな？」と思うのに、そして自分でちゃっちゃと調べにかかるのに、どうして原発の話には「だまされた」とカリカリ怒ってしまうのでしょうね。

さて、今年は久しぶりにインフルエンザが大流行しています。私の勤務校でも、おとといから6学年中に2学年が学年閉鎖となり、さらに学級閉鎖も出ています。

そんな中、つい最近、佐賀県のある町の給食に明治のR-1というヨーグルトを出し続けたところ、この町の児童生徒がインフルエンザにかからなかった、わずか10%になったという結果が報告されました。サンプル数も大きく、隣の町との比較もきちんとできていますので、おそらく信頼に足る分析なのでしょう。

それが報じられるや、スーパーからR-1ヨーグルトが消えました。ネットのオークションでは、1個130円ほどのヨーグルトに「12個8,000円」という値段がついていました。

しかし、考えてみれば、1つや2つ食べたところで、免疫力が高まるわけはないのです。何か月も毎日食べ続けた結果なのですから、今からヨーグルトを食べ始めても、今シーズンのインフルエンザは防げないでしょう。この「おかしさ」は、先ほどのものとは次元が異なります。科学的に正しくても、その受け止め方がおかしいのです。これは科学リテラシーの問題でしょう。おそらくこれは、トレーニングできる。

さらに、科学的におかしくても、それが政治的には正しい、ということがあります。たとえば、私の勤務校でも、一昨年度の新型インフルエンザの流行のとき、文化祭の一般公開を取りやめました。生徒会は、客のいない文化祭は困るとかなり嫌がっていましたが、これはもちろん感染拡大のリスクを小さくするための措置です。これと同じような措置は、日本の各地で行われていました。これがどれだけ効果的だったのかはわかりません。むしろ、科学的根拠に基づく判断というよりも、「どこでもやっているのだから、うちがやらない理由がない」という政治的判断がなかったかというと、それは否定できないと思います（この年、京都大学は、行政当局の休講要請に対して、独自の基準を示して講義を続けました。このときばかりは久しぶりに、京大やるな、と思いました）。

そもそも、インフルエンザへのいちばんの対策は「熱が出れば、部屋にこもって他人と接触しない」ということのはずです。しかし、それができずに満員電車に揺られなければならないから伝染するのでしたら、インフルエンザの流行は、医学的な問題というよりも、政治的・社会的な事象だということになります。こういうことって、多いと思います。科学的に正しくても政治的におかしかったり、政治的に正しくても科学的にはどうかと思うようなことが混在している。

ここに、科学の領域と、政治の領域とにまたがる判断領域が登場します。このことを「トランス・サイエンス」というそうです。

具体的イメージとして、イランが昨今、欧米の経済制裁に抗議して、ホルムズ海峡の封鎖をほのめかしています。最悪の場合、この夏に日本に中東からの原油が届かなくなります。日本の原油の8割はペルシャ湾から来ているそうですから、石油備蓄が底をつく秋から冬には、日本は深刻なエネルギー危機に見舞われるおそれがあります。震災や原発について「最悪の事態を想定して備えよ」というのであれば、外交について最悪の事態を想定して、真剣にイランの海峡封鎖の問題を議論するべきでしょう。となると私は、オイルショックに備えて安全な原発を選抜して再稼働させるという判断も十分ありうると思いますし、それが政治だと思います。なぜ、原発事故における政府の不作為を追及しながら、来たる湾岸危機への備えとして原発再稼働を無視するのでしょうか。

震災前のことになりますが、反原発団体が主催した集会に参加したときのことです。ベラルーシから放射能に汚染された地域の医師の方がゲストとして招かれていました。その講演では、甲状腺ガンがいまだに発生しているという報告とともに、私が意外に思ったのは、「それほど」ガンの発生が増えていないようにグラフからは見えたこと、

そして死因はむしろ、おそらく社会の変化にともなうストレスや経済状況の悪化に伴うものが増えていたように思えました。最後にフロアから「原発についてどう思うか」という質問がありました。「反対」という回答を期待したのでしょう。しかし、先生は「二度とチェルノブイリの悲劇を繰り返してはならない。しかし、ベラルーシには資源がない。だから、安全な原発が欲しい」と答えられました。日本でも同じような主張が、今後も主張されることでしょう。

仮に海峡封鎖が行われたとき、私たちに原発抜きの生活を送る覚悟があるかどうか。こういう問題こそ、ああでもないこうでもないとみんなで話して、そして国民投票に持っていくべき議題だと思いますし、そういう政治と科学とを真ん中に接いだようなことをオープンに議論するようなのが市民社会なんだろうと思います。

そしてそこには、この投票に耐えうる「知性」が求められるでしょう。自分たちの将来を、人任せにせず、自らの判断に基づいて設計していく力。そしてそれを可能とするのが、「考える市民」を育む教育なのだと思います。

5．市民性教育に必要な社会科の知識

シティズンシップ教育において、コーディネーターが必要である、という小玉先生のご指摘がありました。その例として、我がライバル（？）池上彰さんの名前が挙げられていました。しかし、ちょっと引っかかるのです。

池上さんは、ほんとうにとてもわかりやすい解説をされます。いろいろなことを幅広く知って、自分で判断していくためには、必要なことなんだと思います。しかし、池上さんは、原発事故発生直後にはゴールデンタイムの番組に連日連夜出演して「原発はこんなに安全です」と何度も説明されてきた方です。それと同じ口調で、きっと「メルトダウンとは何か」「低線量被曝はいかに危険か（あるいは危険ではないか）」をわかりやすく解説されているのでしょう。そして健康被害が出れば「原発による健康被害にはこのようなものがあります」と解説されるのでしょう。これがコーディネーターというものなのでしょうか。使い古された言葉ではありますが、価値中立性、政治的中立性というものについて、どうなのだろうというのはあります。

その池上さん、東工大の教授になられたそうです。コーディネーターという専門職、ということですか。専門を超える専門、その専門家というのは、なんだかトートロジーのように思うのですが。

近代ジャーナリズムでは、出来事自身が語るかのような「無署名性言語」を用いることによって、あたかも工業製品のように、匿名性を身にまとった記者によって伝えられたニュースが生産されます。そしてそれによって「中立公平・客観報道」という理念を盛り込むことが可能となります（玉木明1996『ニュース報道の言語論』洋泉社）。一見、それは中立であるように見えます。しかし、そうなのでしょうか。ニュースを分かりやすく解説しても、その結果メディアを読み解く力が身につくのかというと、それは別のことのはずです。

実は、中学校や高校の社会科の授業においても、このような「匿名性」あるいは「無生物主語」がしばしば登場します。その典型は「日本国憲法には、〜〜と定められています。」というものです。

憲法とは国家と国民との契約を記したものであり、「私たちは、日本国憲法で、〜〜と定めました。」つまり、主語はあくまで「国民は」であり「私たちは」であるはずなのです。この何気ない表現が、実は、政治に対する当事者性を損なわせ、評論家的視点に私たちを押し留めることになっているのではないかと、最近思うようになりました。

そもそも、憲法を擁護する義務とは、誰にあるのでしょうか。「憲法を守ろう」「人権を守ろう」というポスターを政府が貼り出していますが、それは正しいのでしょうか。

憲法第99条は、こういうものです。「天皇又は摂政及び国務大臣、国会議員、裁判官その他の公務員は、この憲法を尊重し擁護する義務を負ふ。」つまり、憲法擁護義務は、国民にあるのではなく（もちろん国民は、第12条にあるように、立憲政治・民主政治・人権保障を「不断の努力によって保持」しないといけませんが）、国家権力を行使して統治を行う立場にある、いわゆる為政者の側にあるのです。

他にも、今の社会科教育について、これはまずいよなぁ、と思っていることがいろいろとあるのですが、あと２つお話しさせていただきます。

ひとつは、政党政治に対する言及の少なさです。

戦前日本にも、議会政治、政党政治が成立していたこと。二大政党の時代があったこと。しかし両者が足の引っ張り合いをして、国民の信頼を損ねた結果、軍部の台頭を許してしまったこと。この教訓をしっかりと学ばなければ、今の国会の混迷を乗り切ることはできず、戦前の二の舞になってしまいかねません。また、そもそも政治とは、立場の違う者たちが金と権力を奪い合うことであり、政党政治は国民のさまざまな利害を国政の場に持ち込む手段であることです。その側面を捨象してしまっては、議会政治は理解できないし、「政治家は野合ばかりしてけしからん」のような話になってしまうように思います。

もうひとつは、戦後史がすっぽりと抜け落ちてしまっていること。戦後政治についてきちんとした整理と評価がなされていないことです。

すでに「戦後」は67年になります。明治憲法の寿命を上回り、そろそろ奈良時代に並びます。鎌倉時代の半分にも近づきつつあります。そんな期間でありながら、おそらく多くの学校では、戦後史よりも奈良時代の方が時間配分が長いということが起きているのではないかと思われます。これはどういうことなのでしょうか。

たしかに「市民性を育む教育」ができたとしましょう。しかし、戦後史、さらには日本の近現代史という、位置情報を示すGPSも正確な地図もない状態で、正確な政治的判断はできるのでしょうか。自分がどこからやってきて、今どこにいるのかがわからないまま、これからどこに向かうのかを判断することはできませんし、ですからこんな状況では市民性を身につけることはできないし、できたとしてもそれは完全なものにはならないのではないか。

社会科教員として、ごまめの歯ぎしりにしかなっていないかもしれませんが、これをなんとかしようと、今は日々の授業実践に取り組んでいます。

いろいろと話は拡散しましたし、結論もありません。私はこんな思いで、この連続講座を聴きました、というご報告です。